

BB通信

1月vol.15



2016年が始まり、気候も三寒四温の気候になってきました。来月には支部予選も始まりますが、チームとしては、支部予選に向けてしっかりと準備を行いながらも、選手の可能性あふれる将来を第一に考えて練習を進めていくつもりです。力まず、しかし集中力を持って選手が試合で力を出せるように、サポートをしていきます。春季大会も、応援、ご支援をよろしくお願いいたします。

「彼らの成長を願って」

代表 瀬野 竜之介

昨年からOBである筒香嘉智選手、森友哉選手の活躍で、堺ビッグボーイズがTV等から取材を受ける機会が多くなっています。「中学の時から凄かったんですか?」「凄かったエピソードを教えてください!」「どんな練習方法が、今の彼らの活躍に結びつきましたか?」

多くがこんな質問です。

「もし、彼らの今の活躍に少しでも役に立てた理由をあげるとするなら。ひとつは、少しのヒントのみ与えて、答えは自分で考えさせたこと。もうひとつは、ムリをさせなかったこと。ただ、森に関してはどうしても起用さえすれば活躍したので、ムリをさせてしまったことがあり、それを後悔しています。」と、答えています。マスコミ的には望んでいる答えではないのですが……。

そして、タイプが全く違う2人に唯一? 共通していたのは、「保護者の、親としての姿勢」です。いい時も、そうでない時も、ある時は側面から、ある時は背後から、決して前に出ず、『温かく見守る』を実践されていました。

下記はサッカーの指導に関わる方々のコラムですが、参考になりましたので、よろしければ、読んでみてください。

■「種を植える」子育てとは(一部抜粋)

子どもたちがプレーをする前に「ここはこうだ、あれはこうやるんだ」と“正解”を教えることはないだろうか。「主体性を育てるには、温かく見守ることが大事なのです。私たちクルセイロ・ジャポンでは、選手を育成することを『種を植える』と表現します。

<http://www.sakaiku.jp/column/thought/2015/009174.html>

「なにも教えないことで子どもは育つ」順天堂大学蹴球部の教育

■あえて“何も教えない”(一部抜粋)

スクールと言われると、ものごとを教えないといけないイメージがあるので、スクールとは呼びません。子どもたちは遊びに来ているだけで、そこに一緒にいる大学生が遊んであげているだけなんです。サッカースクールでありながら、「サッカーをプレーするかしないかはどちらでも良い」というスタンスをとっています。一見“ほったらかし”というような悪い印象を持たれそうですが、吉村さんの考えやそこに至るまでの経緯を知った上でこの言葉を聞くと、そこに込められている“意図”を強く感じるすることができます。

<http://www.sakaiku.jp/column/thought/2015/009042.html>

スカウトしたくなる子どもの父親は、後ろから見守るスタンスを崩さない

■子どもにライトを持たせて先頭を歩かせる(一部抜粋)

息子をほったらかしにしていたのではありません。適度な距離感を保ちながらも、何か問題が起きれば息子と向き合い、2人きりで膝と膝を突き合わせて話をしたそうです。興津さんは「その選手がプロになれるか、プロになって成功するかは、父親の子どもに対するスタンスが大きく影響する」と言います。子どもに先頭を歩かせながらも、行かせっきりにするのではなく、後ろからついていく——。子どもより前には出ず、後ろから背中を押し、見守るスタンスです。このようにして子どもの自主性をうながし、自立させていく。

<http://www.sakaiku.jp/column/thought/2015/010518.html>

「怖いという心」

コーチ 土井 幹大

恐怖という感情は人間誰しもが持っている感覚だと思います。

高いところが怖かったり、虫が怖かったり人それぞれ怖いものがありますが、野球をしている時でも怖いものはあると思います。

私は練習中によく選手が怖がっているなど感じることもあります。

体操系のメニューをしている時、倒立前転などをすると怖いなど思っている選手は普段できている倒立の形もできなくなります。

その他にも少し強い打球が来ると逃げてしまう選手もいます。

これらは当然の感覚であり仕方のないことだと思いますが、できるようになるためにはこの怖さとうまく付き合っていかなければなりません。

私自身も初めは倒立前転等はできませんでした。

ですが、徐々に倒立から練習していき自信を持ってチャレンジするとできるようになりました。

選手たちも体操系などは怖かったけどやってみたらできました！という選手がほとんどです。

自分でやってみようと思えばいずれは成功します。

逆に怖いことを無理やりやらせてしまうと失敗した時に次の一歩が踏み出せなくなります。

なので、今後の彼らの一歩を踏み出す勇気に繋がることを願って、選手たちが「やってみよう！」と思うまで私たちは見守っていきます。

「読書感想文から見えること」

コーチ 岩井 健一

チームの冬休みの宿題として、「読書感想文」を選手に書いてもらいました。野球だけの人間にならずに、いろんなことに興味を持って取り組んで欲しいという指導者の思いが込められた宿題です。指導者は一人一人の感想文を全て読んでいます。文章を書いてもらおうと、様々なところが見えてきます。

感想文をみていく際に最も気になる点は、「自分の言葉で文章が書けているか」ということです。これからの時代は、「自分の考えを自分の言葉で表現すること」が大切になってくるのではないかと感じています。感想文を読んでいても、本の内容をつらつらと書かれている文章よりも、本の内容を受けて、自分はどう思ったのか、どうしていきたいのか書かれている文章の方が読む側も楽しんで読むことができます。

まだまだ知っている言葉も少ないので、うまく自分の伝えたいことが表現できないこともあると思いますが、何とか自分の言葉で表現しようとしている雰囲気というものは文章を読んでいてわかるものです。

また、字を丁寧に書こうとしているかどうかにも気になる点の一つです。字が綺麗に書けるかどうかということは、能力の差があるので、仕方がない部分もあるかと思っています。しかし、字を丁寧に書くということは、心がけ次第で誰でもできます。そこをやろうとしているのかも、文章を読んでみるとわかってしまいます（字が雑な私が偉そうなことは言えませんが...）。

まとめると、読書感想文にしても、野球にしても、勉強にしても、目の前の結果だけを見るのではなく、その内容から子どもがどのような気持ちで取り組んでいるのかというを観察することが指導者として大切なのだと感じています。なんとかしようという気持ちが伴っていれば、内容も結果も徐々に良くなっていくものです。これからも、野球だけでなく、様々なことにおいて、そういった視点を持って選手と接していきたいと思っています。